

(国際理解教育)

「自尊感情と郷土愛を養い、心豊かにしなやかに生きる力をはぐくむ」

—学びを伝える活動を通して—

大阪 市立大池小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

3つの小学校が統合され、2021年に開校した本校は、外国にルーツをもつ児童がたくさん在籍している。また校区には、西側にコリアタウンや平野川、東側には数多くの中小工場がある。「猪飼野」と呼ばれるこの町は、朝鮮半島から多くの人がこの地に渡り、さまざまな技術をもたらした史跡が町の中に今も残っており、学びの素材が豊富にある。

生まれ育った環境は子どもたちの成長に大きく影響する。そこで地域の特色を生かし、昨年度から、「多文化共生」「地域理解」「国際理解」をキーワードとして、地域のよさを見つけるとともに、多文化共生の意味や目的を考え、学んだことを発信することを通して、共生社会を実現できる子どもを育成することを目指して、研究主題を設定した。

2. 研究の趣旨

「ESDに関する研究最終報告書」の中の身につけたい能力・態度のうち、特に「コミュニケーションを行う力」、「他者と協力する態度」、「つながりを尊重する態度」、「進んで参加する態度」の4点を重視することが大切であると考えた。それらを身につけていくために必要な3つの素地、自尊感情、アイデンティティー、コミュニケーション能力の育成にも目を向け、授業を組み立てていくことにした。そして、各教科と関連させながら学習を展開するために、総合的な学習や生活科の取り組みを見直して『本校のESDカレンダー』も作成した。

また、取り組みを6年間で系統立てて実施していくことが、「自分で考え行動し、仲間と協力し合うことができる力」、「地域のためにできることを考え、それを発信することができる力」をはぐくみ、「共生社会を実現しようとする子どもたちの意欲」に大きくつながると考えた。「出会う」「つながる」「発信する」という3つのテーマを設け、取り組みを照らし合わせながら研究を進めた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 自尊感情の育成

どのように「自尊感情」を高めていくか。「そのまま(ありのまま)でいいよ」だけでは、自尊感情は育ちにくい。よりよい自分、なりたい自分を見つけられるように養っておくべき感情として「自己成就感」があるのではないだろうか。子どもたちに、「役立っている」「認められてうれしい」などという意欲につながる感情をはぐくむことが大切である。そのことが子どもたちの自尊感情を高め、「なりたい自分になる」という「自己実現」を達成していくために必要なことと考えた。

視点② アイデンティティーの育成

これからの社会をたくましくしなやかに生きていくためには、全ての子どもたちが、自分を知り、自分と向き合い、「アイデンティティー」をもつべきであると考ええる。自分にルーツがある国の民族的なものに出会うことは、子どもたちにとって、自分のルーツに関わることに触れ学ぶ機会となり、その他の子どもたちにとっては異なる文化と出会う窓口となる。このような出合いや学びが、自国

の文化や歴史に対する関心につながると同時に、互いを認め合う態度や多文化共生の意識を育てる基盤となると考えた。

視点③ コミュニケーション能力の育成

本校では、コミュニケーション活動（グループ活動、インタビュー、スピーチなど）の学習を通じて、表現力を発信する場を設けた。子どもたちが感じたこと、疑問に思ったこと、学んだことを発信する場を設定し「コミュニケーション能力の育成」を図った。コミュニケーションを図るときに、いつも円滑に進むわけではない。うまくいかなかった時、そこからどのように解決を図るかを考えることが大切と考える。異なるものが出会えば、摩擦が起きることもある。その時に互いの意見を理解し尊重し、自分の意見も相手の意見も生かすことができるかを考えることが重要である。他の人の意見を聞き、自分の意見や考えをよりよいものにしていく「おりあいをつける力」の向上をめざすことが大切であると考えた。

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- 自尊心の育成→自分たちが感じたことや見つけたこと、疑問に思ったことなどを、伝え、相手が聞き、受け入れてくれることで、達成感を感じることができた。
- アイデンティティーの育成→多くの児童に自分の国の文化も友だちの国の文化も大切にしたいという思いや、もっと知りたいという意識が高まってきた。また「地域理解学習」を通して、地域のよさに改めて気づき、多くの児童がより親しみをもち誇りをもつことができた。
- コミュニケーション能力の育成→意見を聞いて自分の考えを広げたり、自分と友だちのどちらの意見も尊重しながら意見をまとめたりすることができる児童の姿も見られるようになってきた。
- 地域・家庭との連携→自分たちが暮らしている町に対する関心が高まり、より愛着をもつことができた地域に向けての活動をすることで自分も地域の一員として活動しているという誇りを感じることができた。外国にルーツがある児童の保護者にゲストティーチャーとして直接児童に伝えてもらう活動も行った。多くの児童がそれぞれの国のことをより身近に感じ親しみをもつことができるとともに、その国にルーツがある児童が自分の国の文化に誇りをもつことにもつながったと考える。
- ESD カレンダーの作成→ESD カレンダーを作成したことで、総合的な学習の時間（1, 2年生は生活科）の取り組みでの身につけたい力にしっかりと着目しながら取り組むことができた。また、他教科とのつながりを考えながら教科横断的な取り組みを進めることができた。

（2）今後の課題

- コミュニケーション活動を多くの場面で取り入れられるよう工夫を続けていく必要がある。
- この地域に住んでいるからこそ知ることができる内容を児童がさらに発信していけるよう取り組んでいく。
- 前学年で学んだことをもとに、どのような進め方で何を学ばせたいのか、どのような力をつけさせたいのか、児童の実態を考慮しながら、取り組む内容をさらに工夫していく必要がある。
- 小中での連携を深め、6年間だけでなく9年間の系統立てた取り組みができるようにしていく。
- 教職員間での指導目的や方法などの伝達についての仕組みをしっかりと整備していく必要がある。目の前にいる一人ひとりの児童を大切にしながら、これからの社会を生きていくために必要な力が身につくような取り組みを進めていくことが重要である。